

黙示録 4 章 1 節－8 節 「この後起こること」

黙示録は 4 章 1 節から雰囲気が全く変わります。1 章から 3 章まで、キリストの栄光と教会についてのことが繰り返されましたが、4 章からは教会用語が出てきません。

3 章の終わりまでには「教会」ということばが 19 回出てきます。4 章からはイスラエル用語がたくさん出てきます。

神様から与えられた 4 つの幻が書かれていますが、ここから第 2 の幻です。小羊ということばは、1 章から 3 章の終わりまで、ただの一度も使われていません。しかし、4 章から 22 章までには 27 回使われています。

この 2 千年間、何の意味もないように思われていたイスラエル用語が、「この後起こること」という部分で多く使われていることは、終わりの日にイスラエルの民が重要な立場にあるからだと考えられます。

実際に、20 世紀中間からイスラエルという国があることから、終わりの日が近付いていることを思わされます。

★ 黙示録 4 章 1 節

その後、私は見た。見よ。天に一つの開いた門があった。また、先にラッパのような声で私に呼びかけるのが聞こえたあの初めの声があった。「ここに上れ。この後、必ず起こる事をあなたに示そう。」

その後、私は見た。見よ。天に一つの開いた門があった
ラッパのような声で私に呼びかけるのが聞こえたあの初めの声があった
ここに上れ。この後、必ず起こる事をあなたに示そう
このことを「必ず起こる事」と念を押しています。

ヨハネは天に上げられ、「この後起こること」が、9 章の終わりまで天国で伝えられます。

10 章 1 節で、地上に御使いが雲に包まれて天から降りてくる幻を見えています。
11 章 15 節から 19 節では、再び天に戻っています。
12 章では、地上で幻を見、14 章では天国にいます。
ヨハネは天と地を催眠状態で動いている様子です。

★ 黙示録 4 章 2 節－3 節

たちまち私は御霊に感じた。すると見よ。天に一つの御座があり、その御座に着いている方があり、その方は、碧玉や赤めのうのように見え、その御座の回りには、緑玉のように見える虹があった。

たちまち私は御霊に感じた

天に一つの御座があり、その御座に着いている方があり

その方は、碧玉や赤めのうのように見え、その御座の回りには、緑玉のように見える虹があった

2003 年に、アメリカのネブラスカに住むトッド・バーボという 4 歳の子どもが、天国に行った経験をしています。『天国は、ほんとうにある』（青志社 2011 年）という本の中で、天国が虹の色であったことを語っています。

また、アキアネ・クラマリックという 12 歳の少女が天国に行った経験を、その様子を絵に描いていますが、やはり虹の色の世界を描いています。

★ 黙示録 4 章 4 節

また、御座の回りに二十四の座があった。これらの座には、白い衣を着て、金の冠を頭にかぶった二十四人の長老たちがすわっていた。

この 24 人は誰なのでしょう。12 使徒とイスラエルの 12 部族の頭たちで、完成された教会を表していると考えられる人々がいます。

エペソ人への手紙 2 章 14 節－15 節に、「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし」「二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり」と記されている箇所が実現した様子であると古くから考えられています。

★ 黙示録 4 章 5 節

御座からいなずまと声と雷鳴が起こった。七つのともしびが御座の前で燃えていた。神の七つの御霊である。

いなずまと声と雷鳴が起こった

七つのともしび＝神様の栄光であるシャカイナ・グローリーを表しています。

■ 神の七つの御霊 ■

- 1 神様の力
- 2 名誉
- 3 富
- 4 知恵
- 5 愛
- 6 あわれみ
- 7 恵み

★ 黙示録 4 章 6 節－8 節

御座の前は、水晶に似たガラスの海のようにであった。御座の中央と御座の回りに、前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた。第一の生き物は、獅子のようであり、第二の生き物は雄牛のようであり、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空飛ぶ鷲のようであった。この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その回りも内側も目で満ちていた。彼らは、昼も夜も絶え間なく叫び続けた。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、今いまし、後に来られる方。」

水晶に似たガラスの海

黙示録 15 章 2 節では「火の混じった、ガラスの海のように」ということばが再び使われています。

四つの生き物

第一の生き物は「獅子のよう」というのは、野獣の王を象徴しています。
第二の生き物は「雄牛のよう」というのは、家畜の王を象徴しています。
第三の生き物は「人間のような顔を持ち」とは、地上の支配者である人間を表しています。
第四の生き物は「空飛ぶ鷲のよう」と言い、鳥の王を表しています。

これは、イザヤ書 6 章 2 節に書かれている六つの翼を持っているセラフィム、またエゼキエル書 10 章 21 節に書かれている四つの翼を持っているケルビムと同じ種類の生き物であると思います。